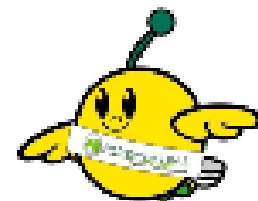
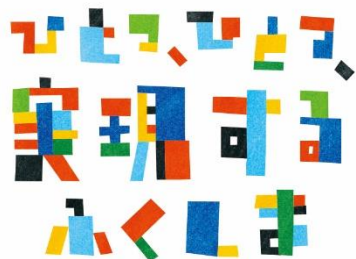


森林における放射性物質の 状況と今後の予測について

- 1 モニタリング調査の進め方
- 2 令和4年度調査の結果
- 3 放射性物質の動態変化
- 4 まとめ



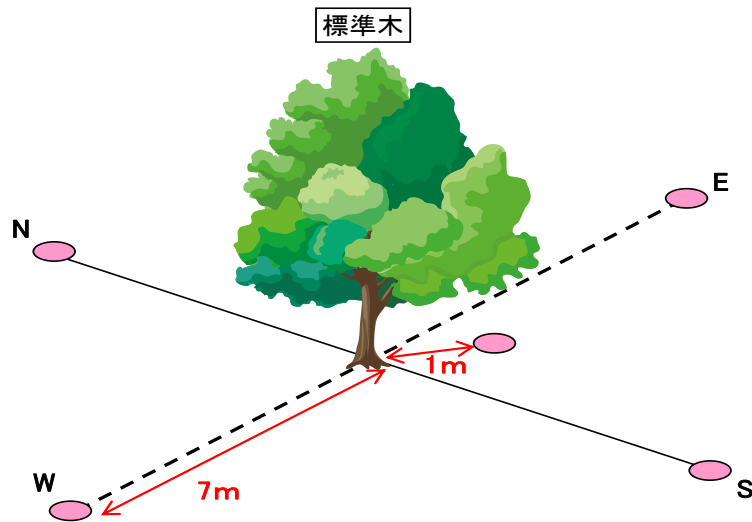
モニタリング調査の実施状況

年度	調査箇所数	調査項目の内訳				調査実施主体
		箇所数	空間線量率	樹木のCs濃度	樹木(部位別) 土壌等のCs濃度	
平成23(2011)年度	362	362	○			県(直営)
平成24(2012)年度	925	785	○			県森林整備加速化・ 林業再生協議会 (補助)
		90	○	○		
		50	○		○	
平成25(2013)年度	1,006	849	○			県(委託)
		81	○	○		
		76	○		○	
平成26(2014)年度	1,193	1,117	○			県(委託)
		76	○		○	
平成27(2015)年度	1,230	1,154	○			県(委託)
		76	○		○	
平成28(2016)年度	1,250	1,179	○			県(委託)
		71	○		○	
平成29(2017)年度	1,300	1,219	○			県(委託)
		81	○		○	
平成30(2018)年度	1,300	1,219	○			県(委託)
		81	○		○	
令和元(2019)年度	1,300	1,219	○			県(委託)
		81	○		○	
令和2(2020)年度	1,300	1,219	○			県(委託)
		81	○		○	
令和3(2021)年度	1,300	1,220	○			県(委託)
		80	○		○	
令和4(2022)年度	1,300	1,220	○			県(委託)
		80	○		○	

※Csは放射性セシウムの略

※調査地の樹種はスギ、アカマツ、ヒノキ、カラムツ及び広葉樹

・学識経験者の意見聴取(放医研・森林総研・福島大・北海道大)
 ・IAEAに報告(福島県とIAEAとのプロジェクト)



選定した標準木の周辺5点で計測



空間線量率の測定状況

森林内の調査箇所における標準的な値を測定

- ・標準木から1m離れた地点と東西南北に7m離れた4地点で測定 (計5点の平均)
- ・各地点において、指示値が安定した後に1分間隔で3回測定値を記録
- ・測定高さは1m
- ・測定機器は1年以内に校正したシンチレーション式サーベイメーターとする
- ・検出器部分をビニル袋で覆うなど、機器の現場での汚染防止措置を講じる
- ・窪地の底や有機物が削れた急斜面等の箇所は避ける

立木試料の採取



辺材・心材の採取
(おが粉状試料を採取)



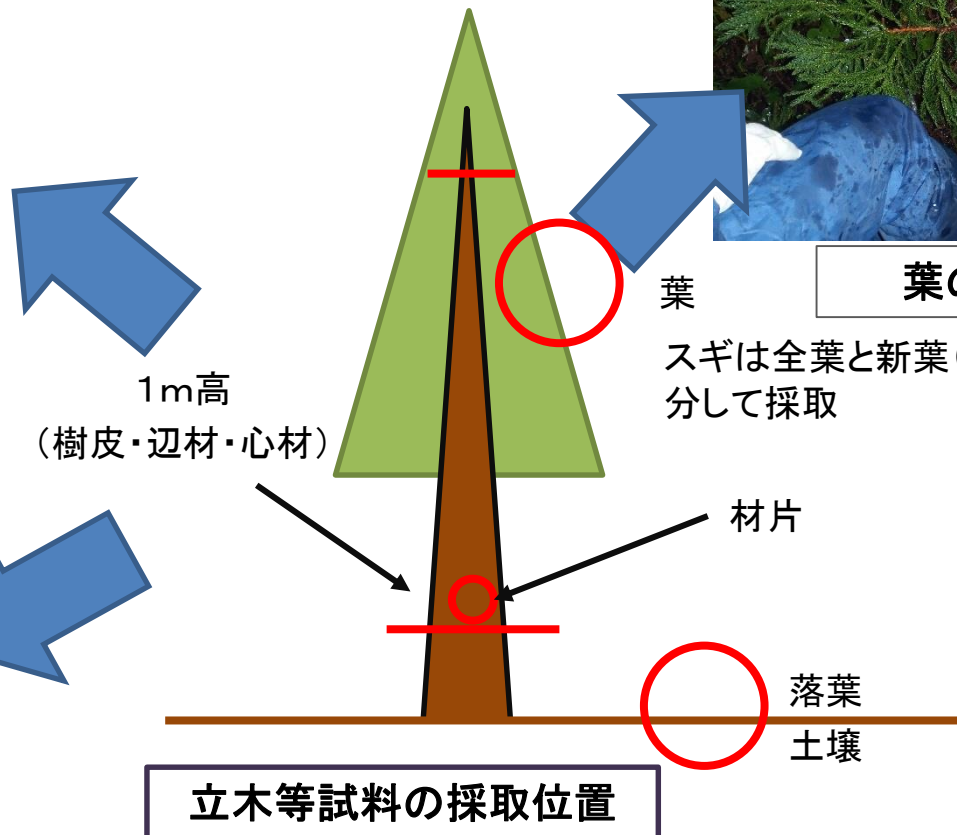
葉の採取

葉

スギは全葉と新葉(R3~R4生長分)を区分して採取



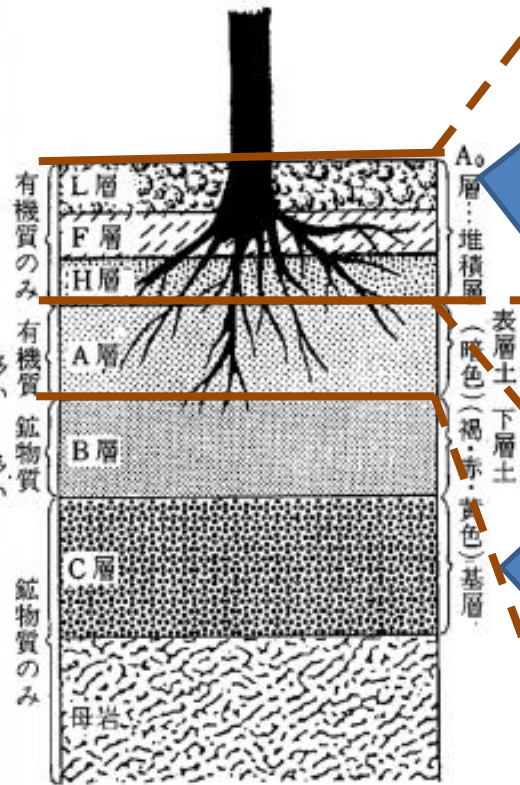
樹皮の採取



部位別(樹皮、辺材、心材及び葉)に試料を採取

土壌試料の採取

落葉層と土壌層に
区分して試料採取



落葉、土壌試料
採取位置の模式図



25cm × 25cmから試料を採取

落葉試料の採取



土壌試料の採取

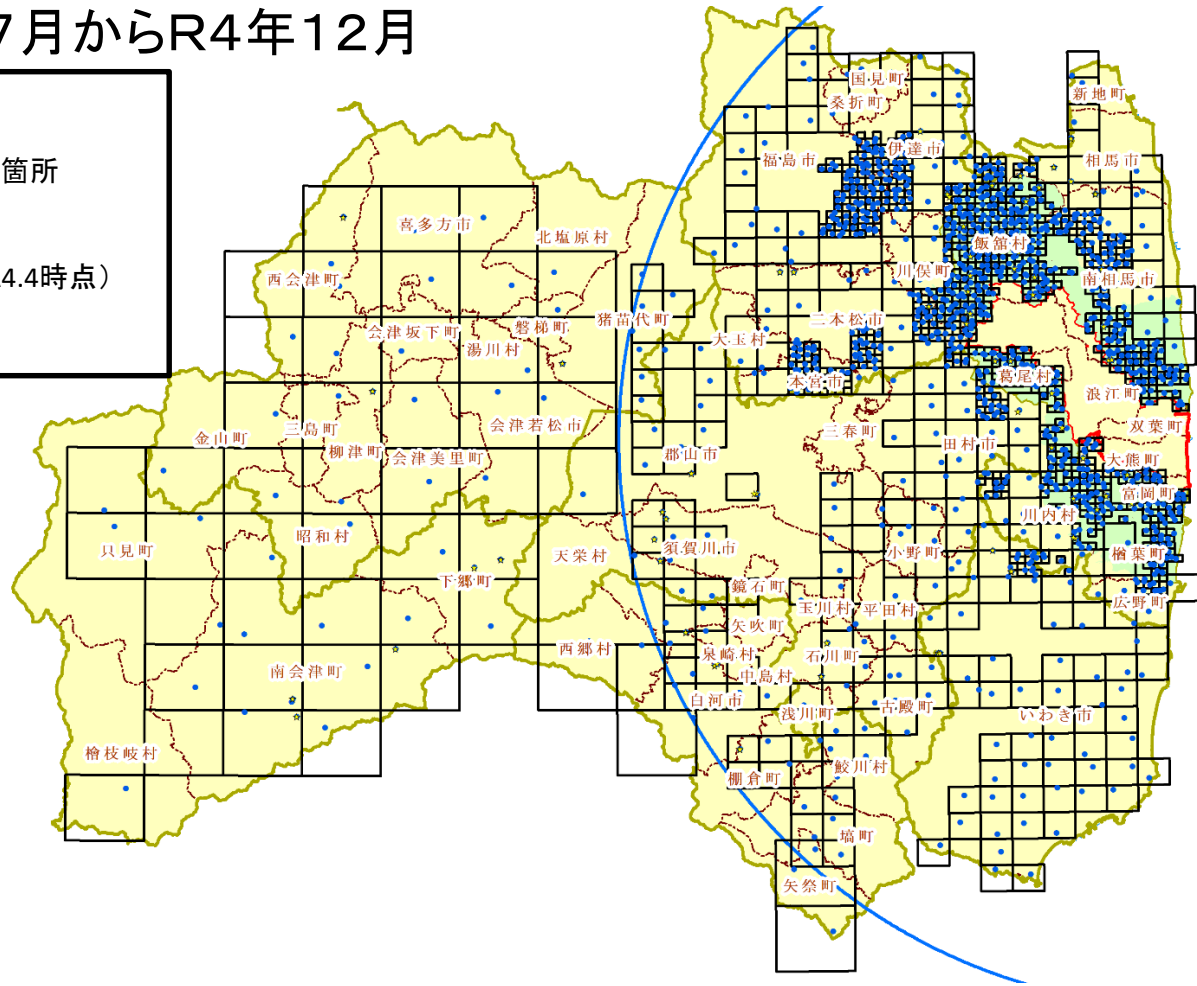
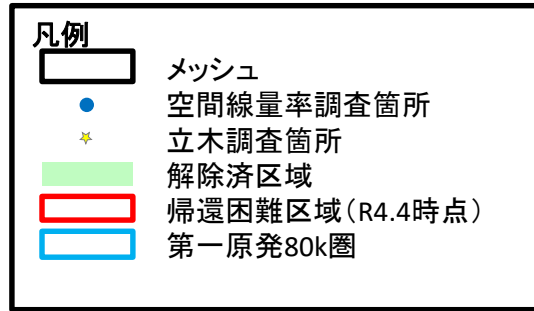
Cs
濃
度
分
析
へ



ゲルマニウム
半導体検出器

モニタリング調査の概要

調査実施時期 R4年7月からR4年12月



- 原発からの80km圏外は10kmメッシュ、80km圏内は4kmメッシュ
- H23年度 $3.4\mu\text{Sv/h}$ 、H24年度以降 $1.0\mu\text{Sv/h}$ を計測した箇所は1kmメッシュに細分化
- H24年度から避難指示解除準備区域内等の調査箇所を追加し現在1300箇所
(帰還困難区域は立入が制限されていることから未実施)
- H23年度から362箇所は継続して調査している

空間線量率の管内別測定結果

令和4年度(2022)調査1,300箇所の測定結果

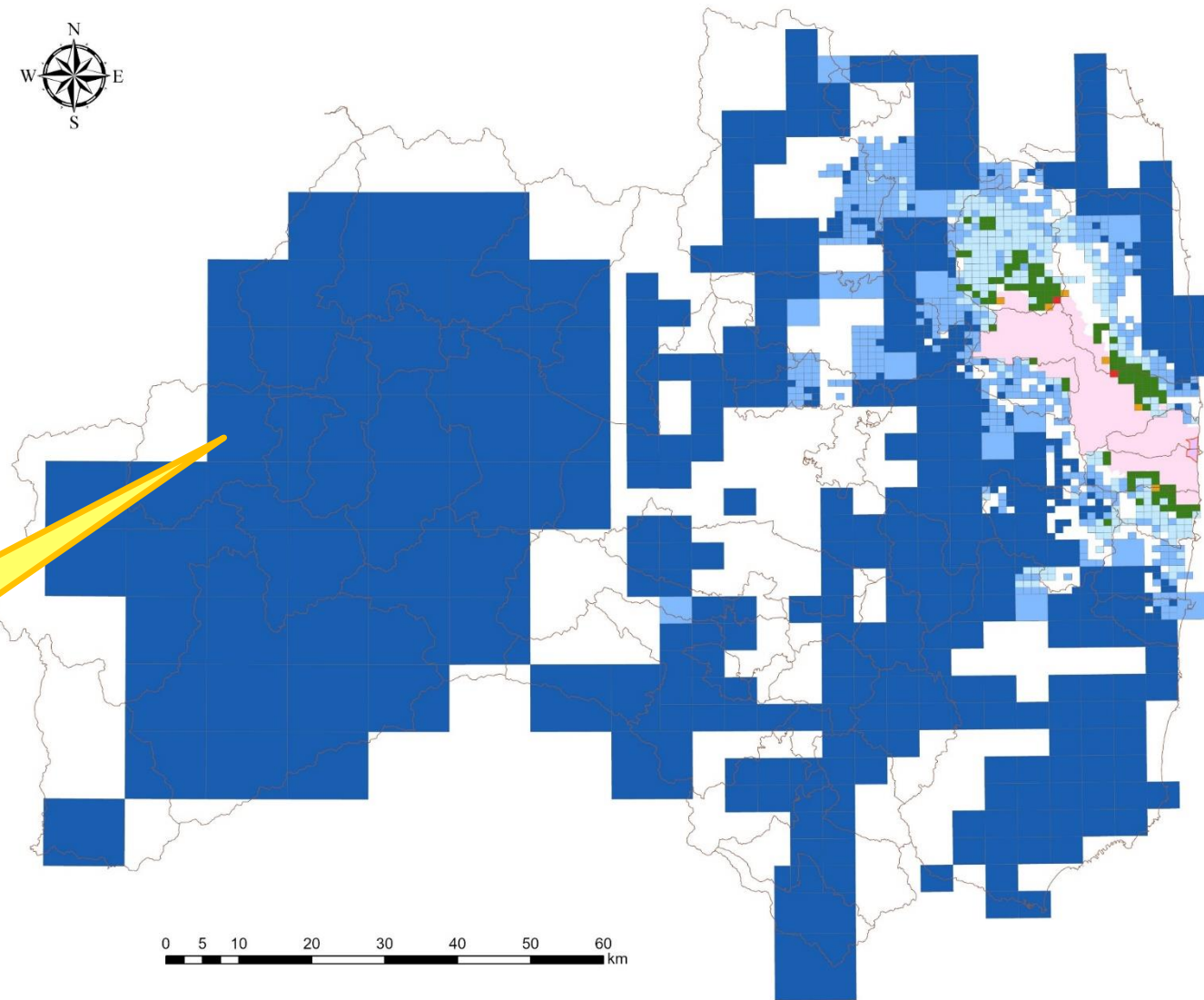
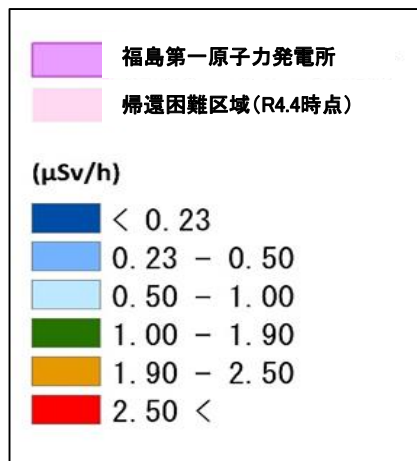
単位(μSv/h)

管内別	箇所数	最大値	最小値
県北	361	1.09	0.04
県中	122	0.42	0.04
県南	38	0.20	0.04
会津	33	0.08	0.03
南会津	22	0.08	0.03
相双	653	2.62	0.08
いわき	71	0.84	0.04
県全体	1,300	2.62	0.03

2023年3月1日現在の換算値



・相双管内については、帰還困難区域に隣接していることから、空間線量率が高い値となっている。



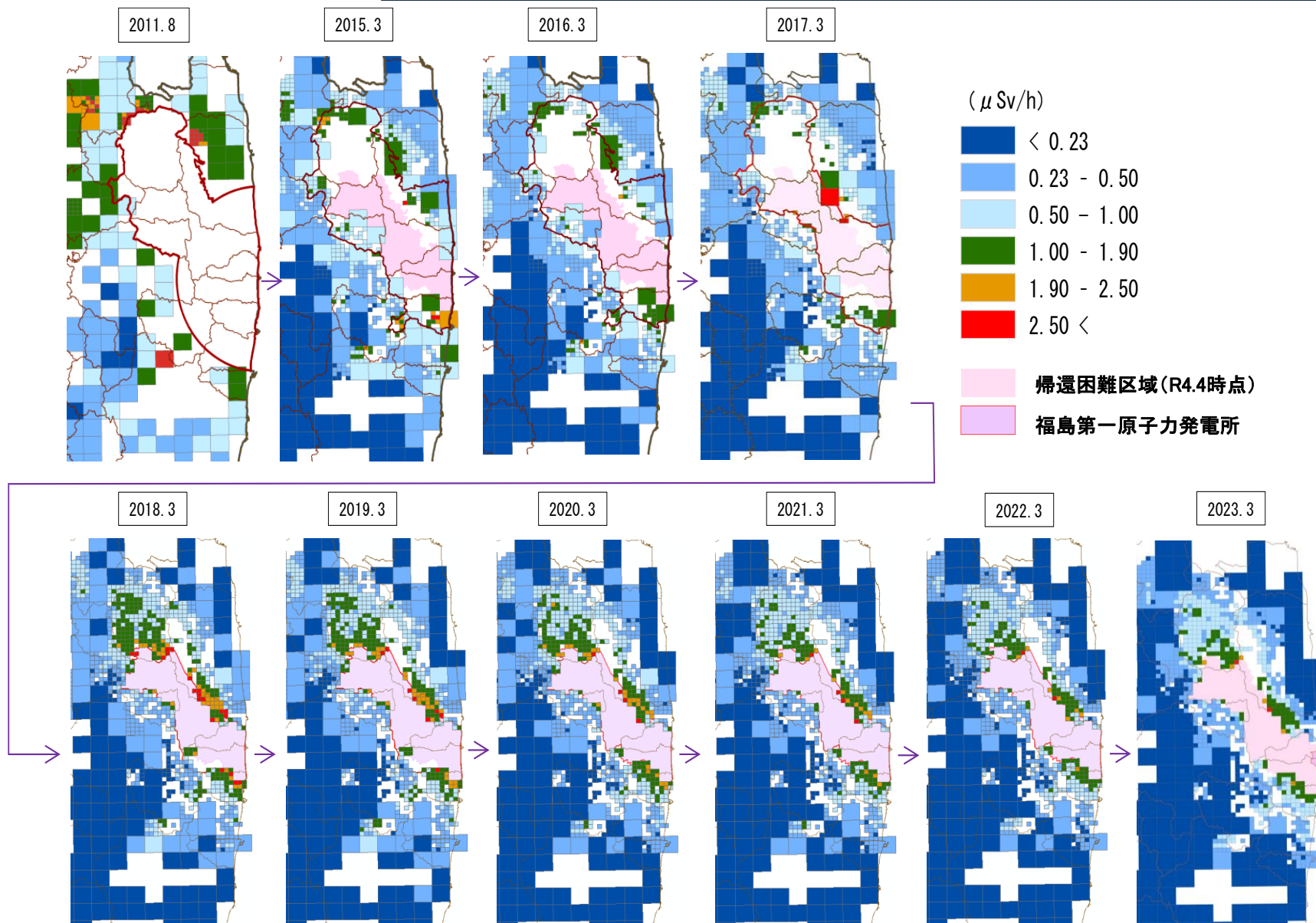
県南、会津、南会津は
すべて $0.23\mu\text{Sv/h}$ 未満



森林内の空間線量率は年々減少 <継続362箇所>

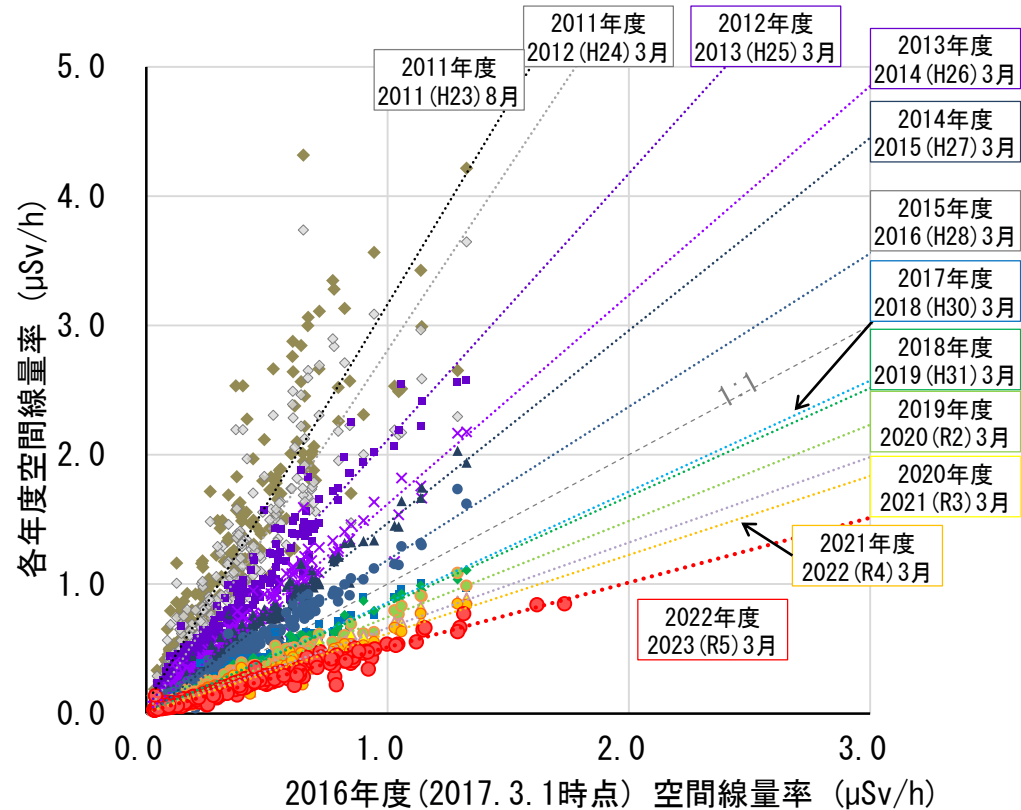
○ $0.23\mu\text{Sv/h}$ 未満の区域の増加	42箇所12%(H23)	→	263箇所	73%(R4)
○ $1.00\mu\text{Sv/h}$ 以上の区域の減少	127箇所35%(H23)	→	0箇所	0%(R4)

帰還困難区域周辺の空間線量率



帰還困難区域周辺の調査箇所の空間線量率も徐々に低下

※ 平成23年度(2011年)からの
継続調査箇所362点を抽出

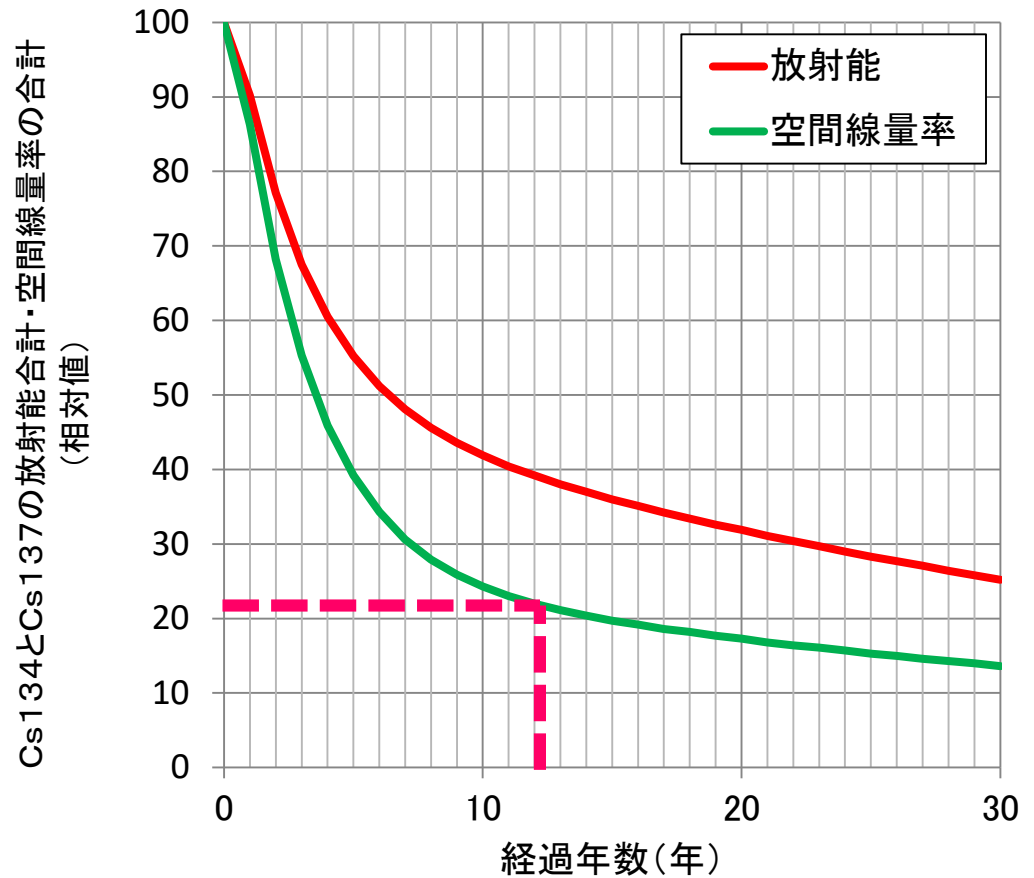


(μSv/h)	H23 (2011) 2011年8月	H23 (2011) 2012年3月	H24 (2012) 2013年3月	H25 (2013) 2014年3月	H26 (2014) 2015年3月	H27 (2015) 2016年3月	H28 (2016) 2017年3月	H29 (2017) 2018年3月	H30 (2018) 2019年3月	R1 (2019) 2020年3月	R2 (2020) 2021年3月	R3 (2021) 2022年3月	R4 (2022) 2023年3月
平均	0.91	0.79	0.62	0.44	0.39	0.32	0.27	0.23	0.23	0.20	0.18	0.17	0.17
中央値	0.60	0.52	0.44	0.31	0.25	0.21	0.18	0.16	0.15	0.13	0.12	0.11	0.11
最大値	4.32	3.74	2.58	2.18	2.03	1.73	1.33	1.09	1.11	1.09	0.89	0.85	0.81
最小値	0.09	0.07	0.09	0.05	0.03	0.03	0.03	0.03	0.03	0.03	0.03	0.02	0.03
標準偏差	0.80	0.69	0.50	0.39	0.36	0.29	0.24	0.20	0.20	0.18	0.16	0.15	0.14
変動係数	0.88	0.88	0.81	0.88	0.92	0.91	0.88	0.87	0.87	0.88	0.86	0.86	0.84
箇所数	362	362	362	362	362	362	362	362	362	362	362	362	362
物理学的減衰	0.91	0.79	0.63	0.51	0.42	0.36	0.32	0.28	0.26	0.24	0.22	0.21	0.20

空間線量率の低減率 H23.8~R5.3 約81% ⇒ 概ね物理学的減衰に従って低減

Csの減衰曲線

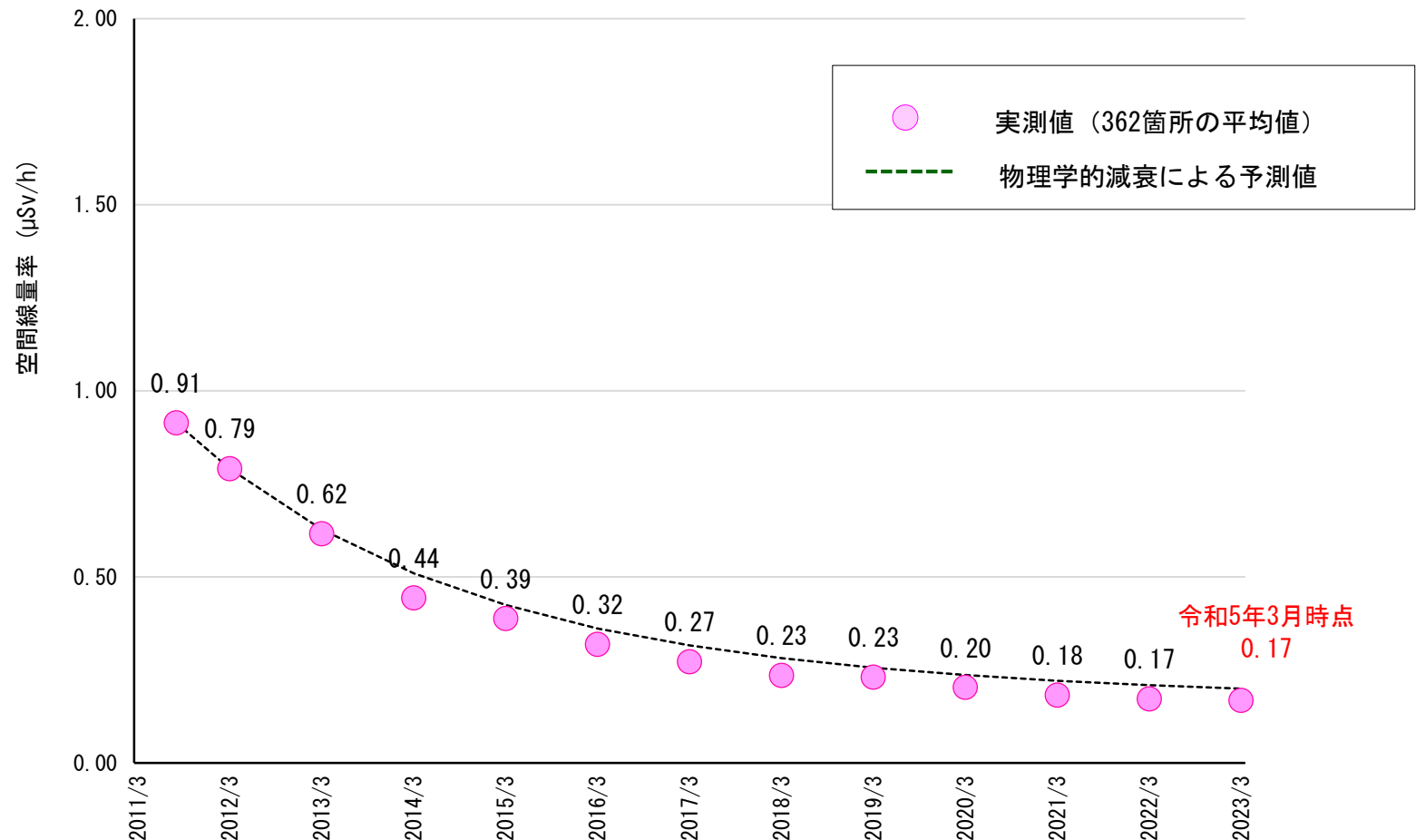
経過年数(年次)	放射能の減衰	空間線量率の減衰
0	H23	100
1	H24	90
2	H25	77
3	H26	68
4	H27	60
5	H28	55
6	H29	51
7	H30	48
8	R1	46
9	R2	44
10	R3	42
11	R4	40
12	R5	39
13	R6	38
14	R7	37
15	R8	36
16	R9	35
17	R10	34
18	R11	33
19	R12	33
20	R13	32
21	R14	31
22	R15	30
23	R16	30
24	R17	29
25	R18	28
26	R19	28
27	R20	27
28	R21	26
29	R22	26
30	R23	25



12年経過した現在の空間線量率は約22%まで低減

放射能と空間放射線量率の減衰割合の推計
 HP「福島第一原発事故直後の福島県中を通りにおける放射性物質の飛散状況はどのようなものだったか—事故直後に行われた高エネルギー加速器研究機構と理化学研究所の合同チームによる調査結果—」を基に作成

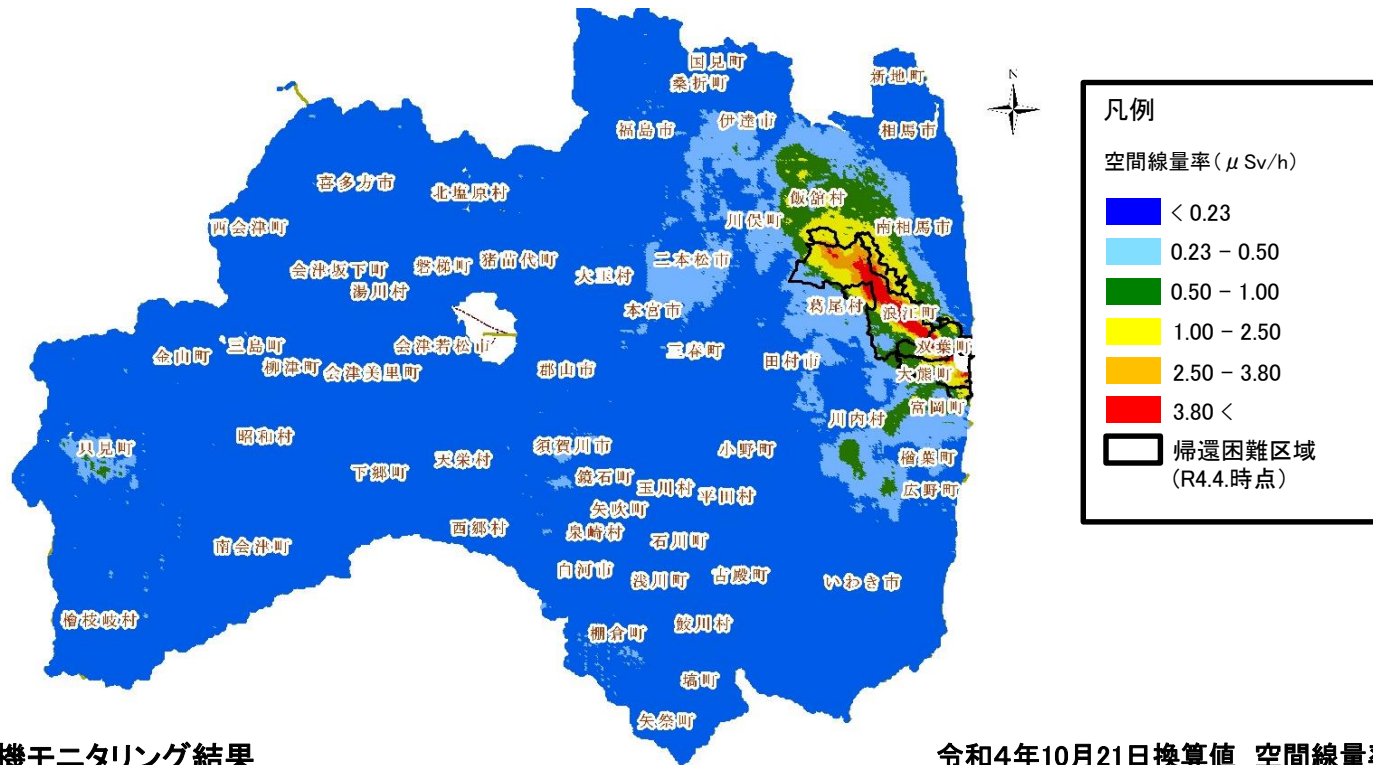
Csの減衰曲線との比較



放射性Csの物理的減衰曲線とモニタリング実測値(362箇所の平均値)の関係

- 現在まで、**森林内の空間線量率は物理学的減衰率とほぼ同じく低下**
- **今後も放射性Csの物理学的減衰率に従い低下が見込まれる**
※降雨等による流入・流出の影響(ウェザリング効果)は考慮していない

航空機モニタリングの結果



2022(R4)年度 航空機モニタリング結果

令和4年10月21日換算値 空間線量率(μSV/h)

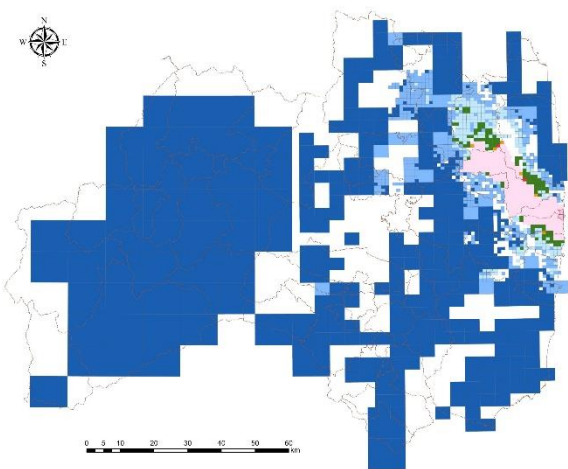
県内全域	全県	県北	県中	県南	会津	南会津	相双	いわき
平均値	0.205	0.180	0.128	0.124	0.103	0.118	0.740	0.134
最大値	11.000	1.200	0.560	0.350	0.390	0.960	11.000	0.800
最小値	0.100	0.100	0.100	0.100	0.100	0.100	0.100	0.100

※全測定点 212, 610地点 (2023(R5).3.10公表)原子力規制委員会公表資料より作成

県内森林域	総計	県北	県中	県南	会津	南会津	相双	いわき
平均値	0.214	0.175	0.127	0.129	0.104	0.118	0.865	0.143
最大値	11.000	1.200	0.560	0.350	0.390	0.960	11.000	0.800
最小値	0.100	0.100	0.100	0.100	0.100	0.100	0.100	0.100

※測定点 152, 149地点 (2023(R5).3.10公表)原子力規制委員会公表資料より作成

原発事故から12年後
令和4年度(2023.3)の結果

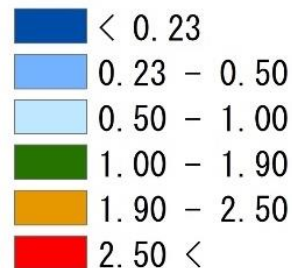


※2011年8月から継続調査を実施している362箇所に基づく予測値

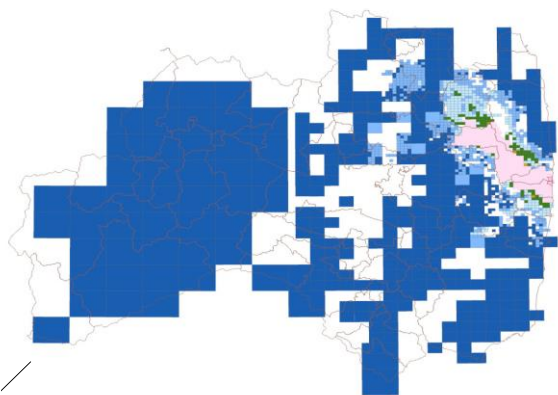
(単位は $\mu\text{Sv/h}$)

2023年3月現在	原発事故15年後 2026年3月現在	原発事故20年後 2031年3月現在	原発事故25年後 2036年3月現在
0.17	0.15	0.14	0.13

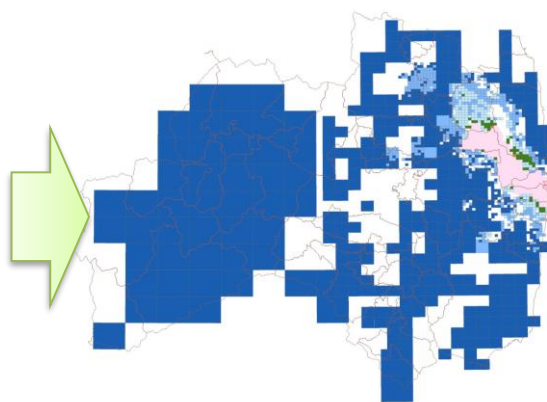
($\mu\text{Sv/h}$)



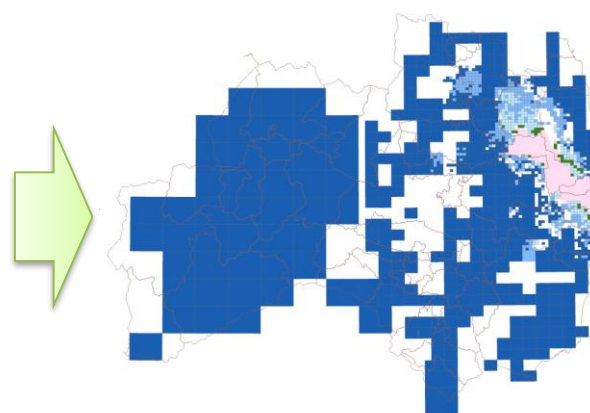
原発事故から15年後
2026年の予測



原発事故から20年後
2031年の予測



原発事故から25年後
2036年の予測



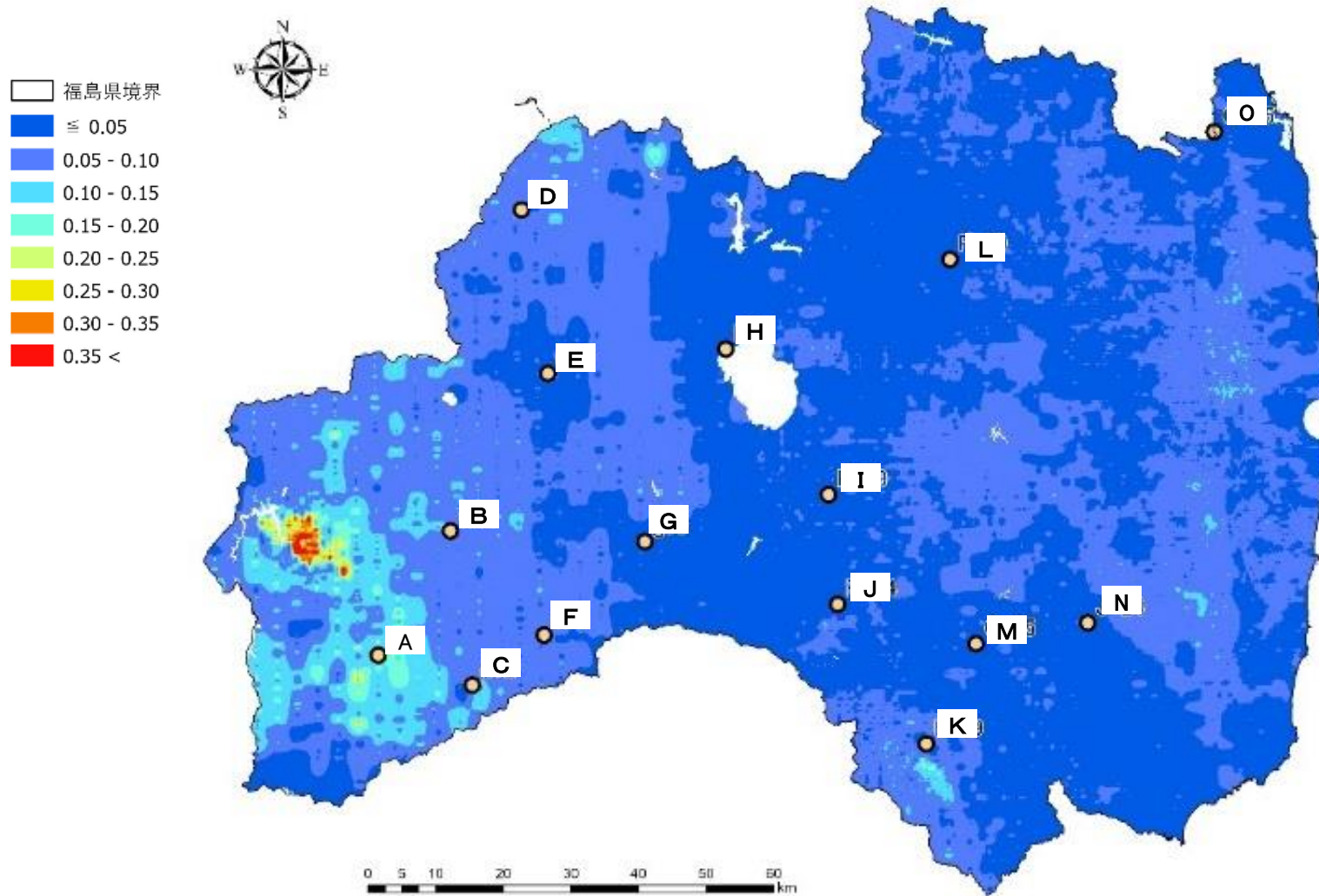
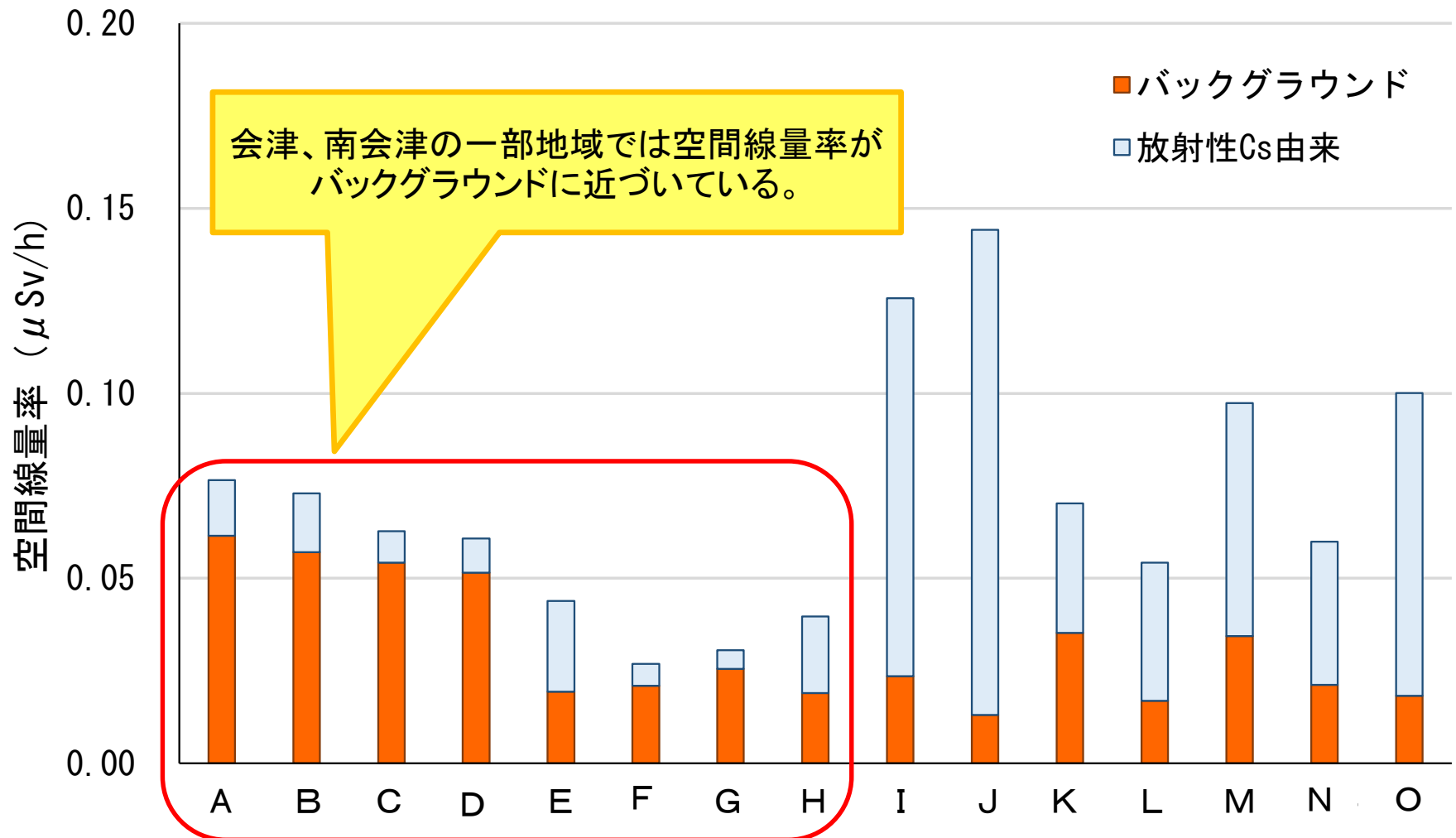


図:天然放射性核種由来の空間線量率マップ(原子力規制庁)

※バックグラウンドとは:地表に存在する代表的な天然由来放射性核種



樹木調査箇所位置図



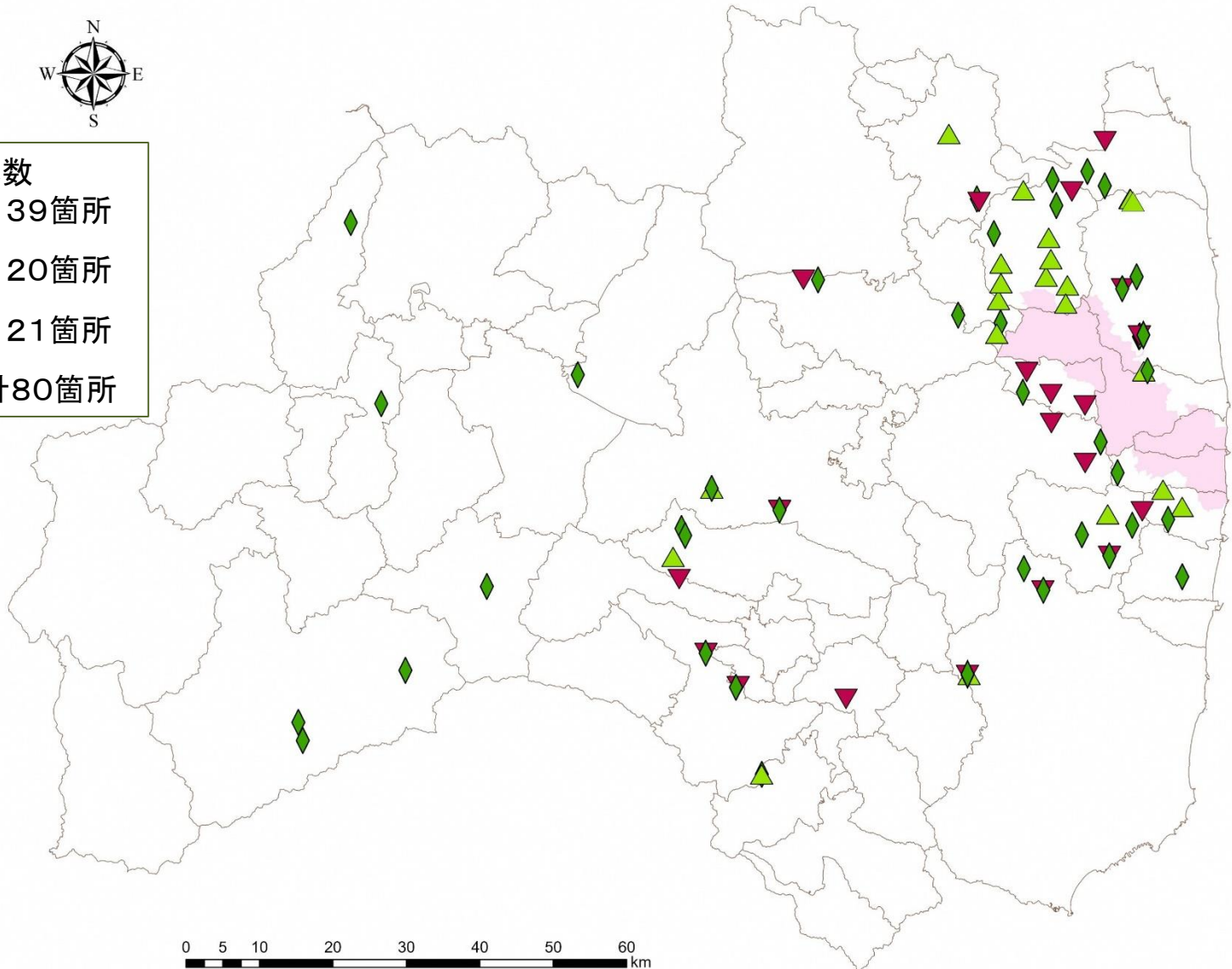
樹種毎の検体数

スギ ◆ 39箇所

アカマツ ▼ 20箇所

ヒノキ ▲ 21箇所

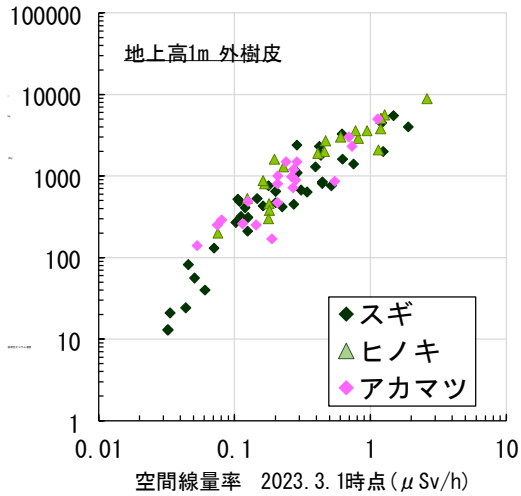
計80箇所



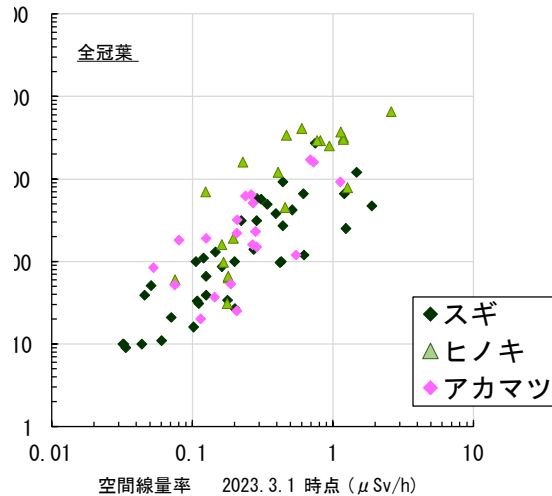
空間線量率とCs濃度の関係

空間線量率と各種放射性Cs濃度との関係

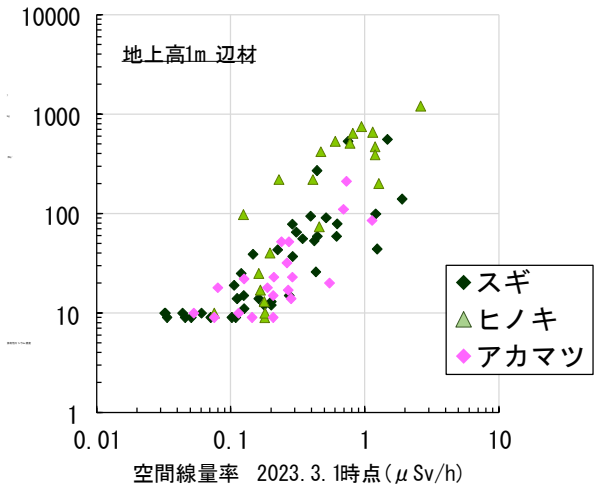
【1m高 外樹皮】



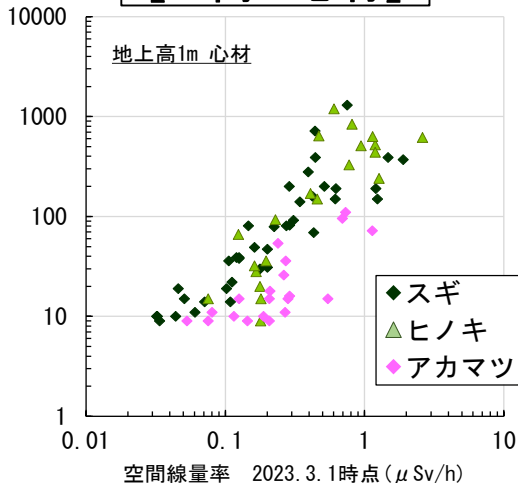
【葉】



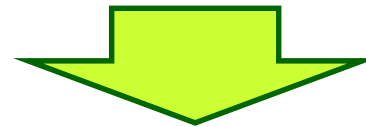
【1m高 辺材】



【1m高 心材】

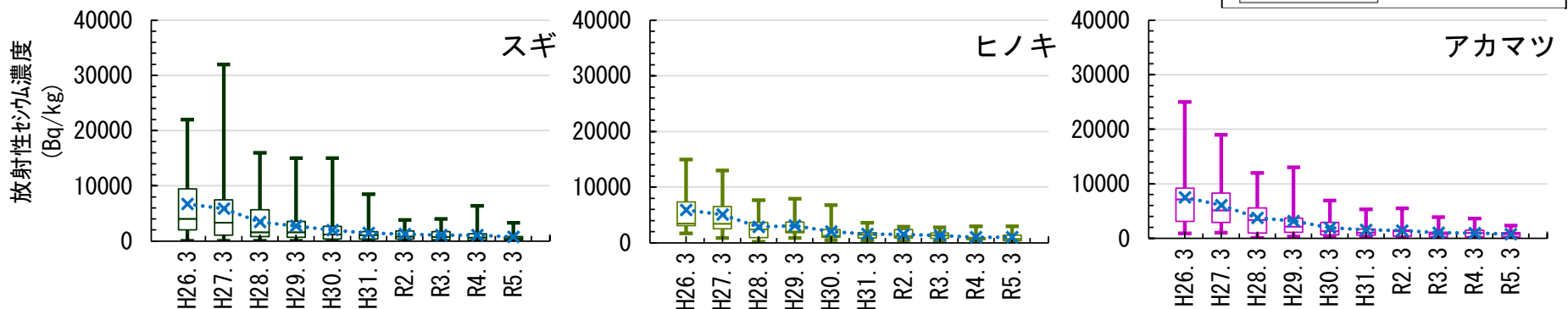


空間線量率が高いほど
材等に含まれる放射性Cs濃度も高い傾向



空間線量率の把握が今後の林業生産活動の目安に

地上高1m外樹皮 (Bq/kg)

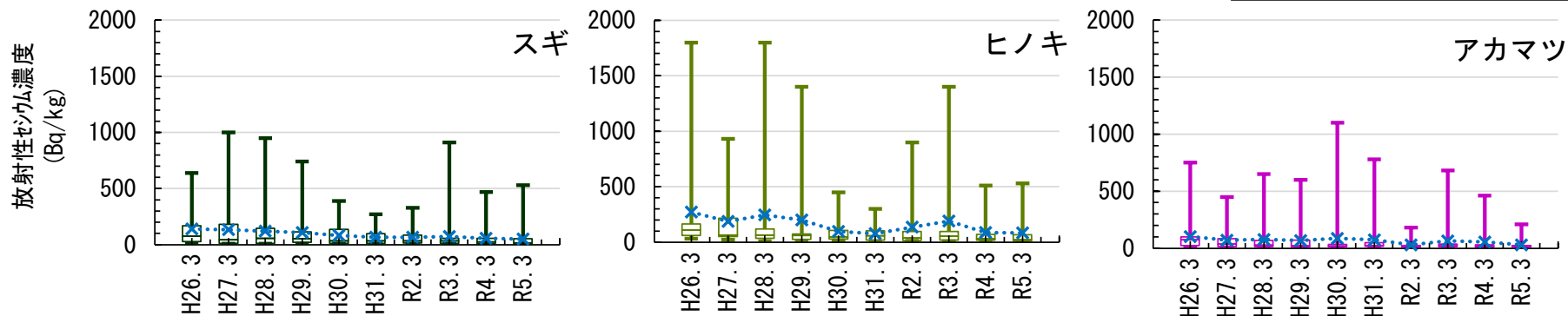


地上高1m外樹皮		単位	2013年度 H26.3時点	2014年度 H27.3時点	2015年度 H28.3時点	2016年度 H29.3時点	2017年度 H30.3時点	2018年度 H31.3時点	2019年度 R2.3時点	2020年度 R3.3時点	2021年度 R4.3時点	2022年度 R5.3時点
スギ	平均値	Bq/kg	6673	5860	3466	2716	1958	1460	1291	1091	1052	741
	2013年度比	%	100.0	87.8	51.9	40.7	29.3	21.9	19.4	16.4	15.8	11.1
ヒノキ	平均値	Bq/kg	6190	5096	2861	3087	2019	1589	1509	1323	983	1015
	2013年度比	%	100.0	82.3	46.2	49.9	32.6	25.7	24.4	21.4	15.9	16.4
アカマツ	平均値	Bq/kg	7477	6056	3769	2818	1924	1525	1428	1012	980	782
	2013年度比	%	100.0	81.0	50.4	37.7	25.7	20.4	19.1	13.5	13.1	10.5

※2013年度からの継続調査箇所の平均値

全樹種で時間の経過と共に放射性セシウムは低減傾向にある。

地上高1m辺材 (Bq/kg)

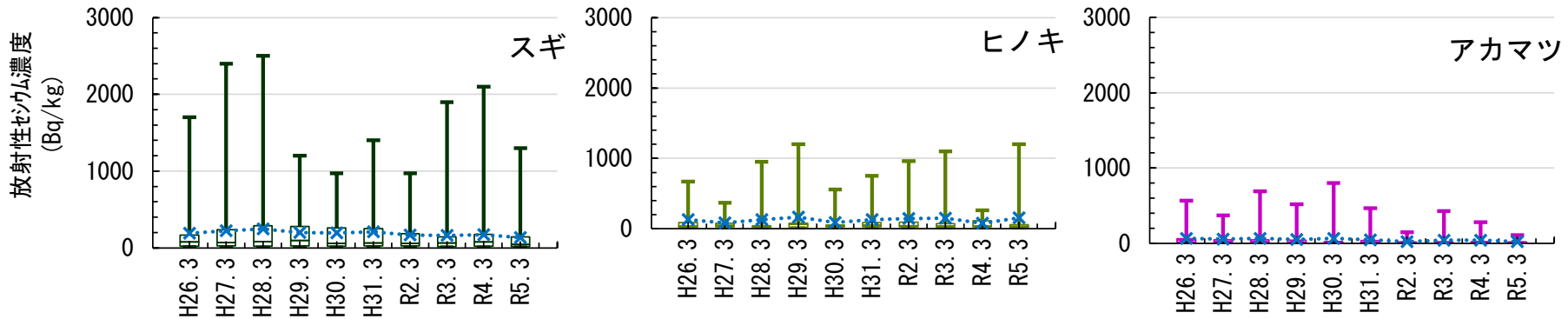


地上高1m 辺材		単位	2013年度 H26.3時点	2014年度 H27.3時点	2015年度 H28.3時点	2016年度 H29.3時点	2017年度 H30.3時点	2018年度 H31.3時点	2019年度 R2.3時点	2020年度 R3.3時点	2021年度 R4.3時点	2022年度 R5.3時点
スギ	平均値	Bq/kg	140	133	121	108	81	67	67	72	58	51
	2013年度比	%	100.0	94.9	86.4	77.5	58.1	47.8	47.7	51.2	41.3	36.5
ヒノキ	平均値	Bq/kg	295	186	244	200	97	78	134	190	86	83
	2013年度比	%	100.0	62.9	82.6	67.8	33.0	26.4	45.5	64.2	29.2	28.0
アカマツ	平均値	Bq/kg	104	71	76	65	85	73	29	65	56	31
	2013年度比	%	100.0	67.9	73.6	62.1	82.1	70.7	27.8	62.2	54.0	30.1

※2013年度からの継続調査箇所の平均値

全樹種で低減傾向にあるが
直接被ばくした樹皮や葉に比べると低減率は小さい。

地上高1m心材 (Bq/kg)



地上高1m 心材	単位	2013年度	2014年度	2015年度	2016年度	2017年度	2018年度	2019年度	2020年度	2021年度	2022年度	
		H26.3時点	H27.3時点	H28.3時点	H29.3時点	H30.3時点	H31.3時点	R2.3時点	R3.3時点	R4.3時点	R5.3時点	
スギ	平均値	Bq/kg	191	224	245	198	193	210	166	162	171	132
	2013年度比	%	100.0	117.3	128.2	103.7	101.0	110.0	87.0	84.9	89.6	69.4
ヒノキ	平均値	Bq/kg	142	83	130	163	87	127	147	151	77	157
	2013年度比	%	100.0	58.3	91.7	115.4	61.4	90.0	103.6	106.6	54.6	110.9
アカマツ	平均値	Bq/kg	69	56	69	51	66	50	24	42	42	22
	2013年度比	%	100.0	81.4	100.4	74.5	95.5	72.9	34.3	61.7	60.7	32.2

※2013年度からの継続調査箇所の平均値

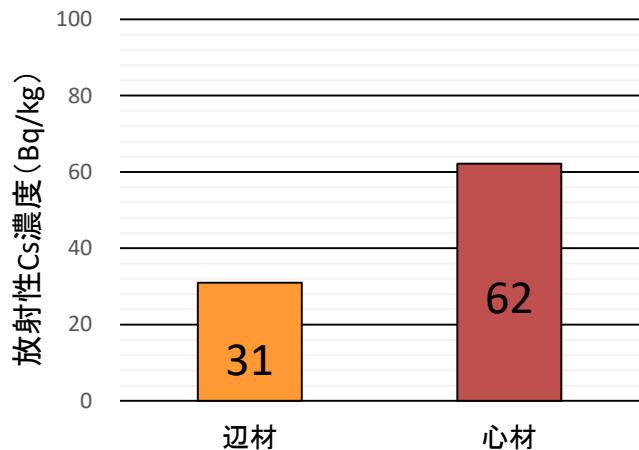
スギ: 変化幅が小さく、年度により濃度の増減がある。
 ヒノキ: 年度により濃度の増減がある。
 アカマツ: 低い濃度で概ね横ばい。

木材に含まれるCs濃度

<空間線量0.5 μ Sv以下の区域>

・立木調査80箇所のうち

空間線量0.50 μ Sv/h以下の56箇所の平均データ



スギ、ヒノキ、アカマツで調査を行い

スギは心材の方が辺材よりも濃度が高い傾向

※ 平均値の比較: 定量下限値未満を示す試料についてはその濃度として定量下限値を採用

<参考>

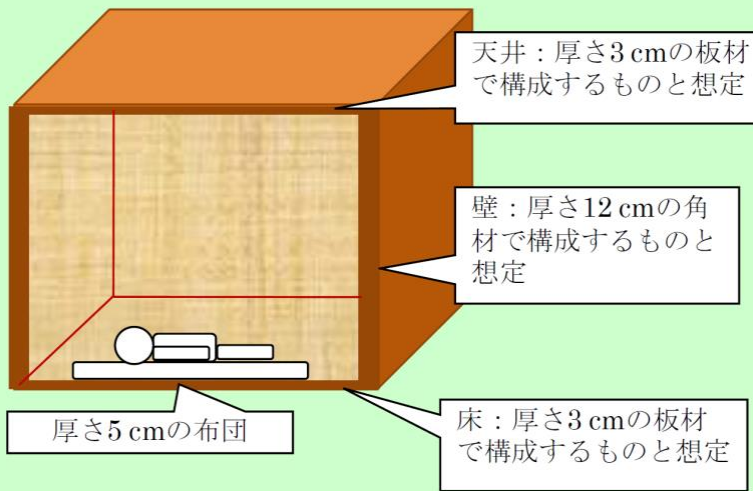
・継続調査箇所における全樹種平均データ(辺材・心材)

辺材

51Bq/kg (2022 N=63)
 最大: 127Bq/kg (2015 N=66)
 最小: 65Bq/kg (2019 N=66)

心材

105Bq/kg (2022 N=63)
 最大: 170Bq/kg (2015 N=66)
 最小: 117Bq/kg (2019 N=66)



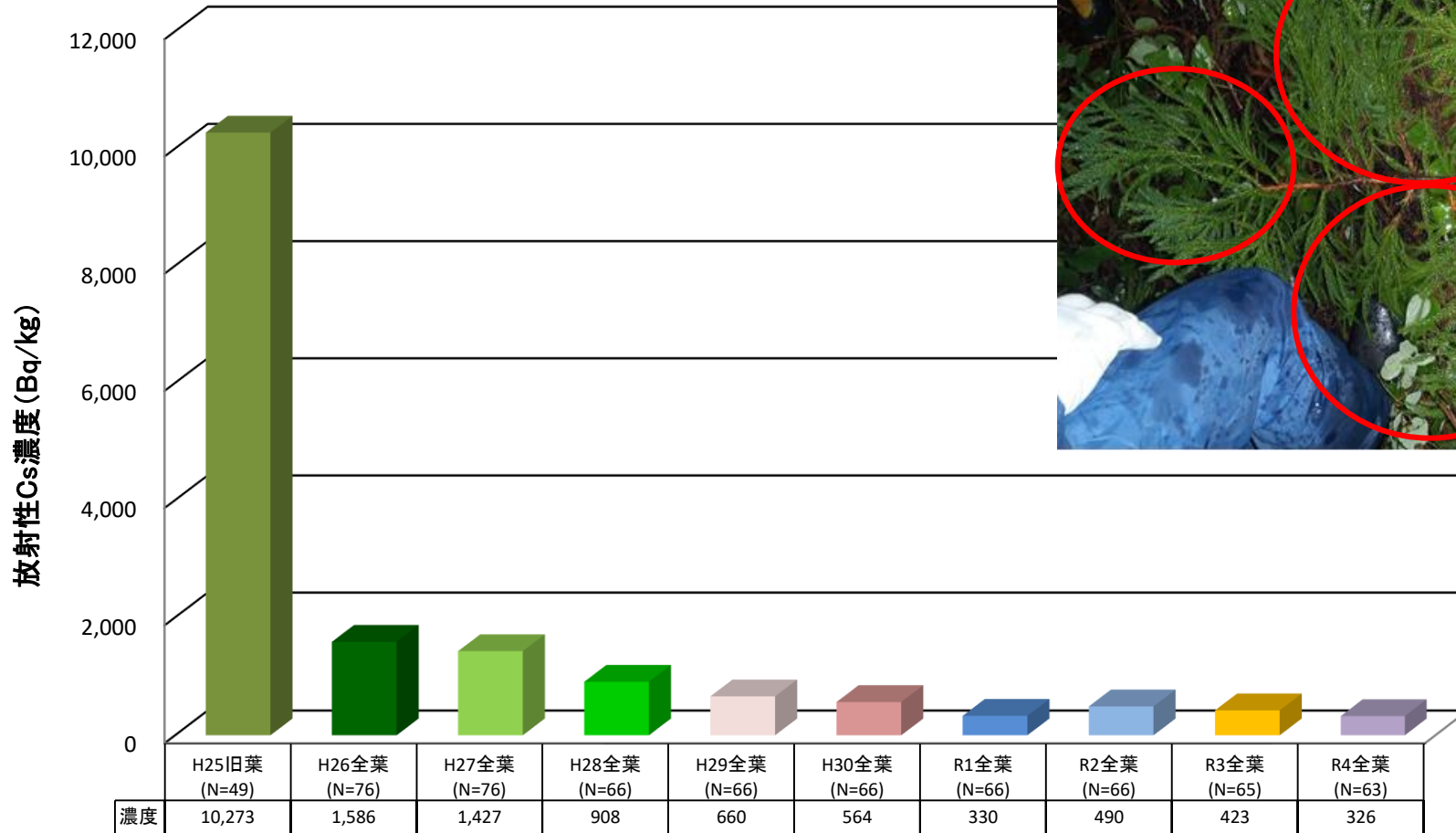
学識経験者に確認したところ、本調査でCs濃度の最大値^{※1}を示した木材を住宅に使用した場合の追加被ばく量は年間0.031 mSv^{※2} **時間当り0.004 μ Sv/h**は、自然放射線による年間被ばく量2.1 mSvに比べ著しく小さく、環境や健康への影響はほとんどないとの評価が得られた。

※1 1,300 Bq/kg (帰還困難区域に隣接する調査地から採取)

※2 林野庁資料『木材で囲まれた居室を想定した場合の

試算結果・IAEA-TECDOC-1376』に基づき試算

葉に含まれるCs濃度

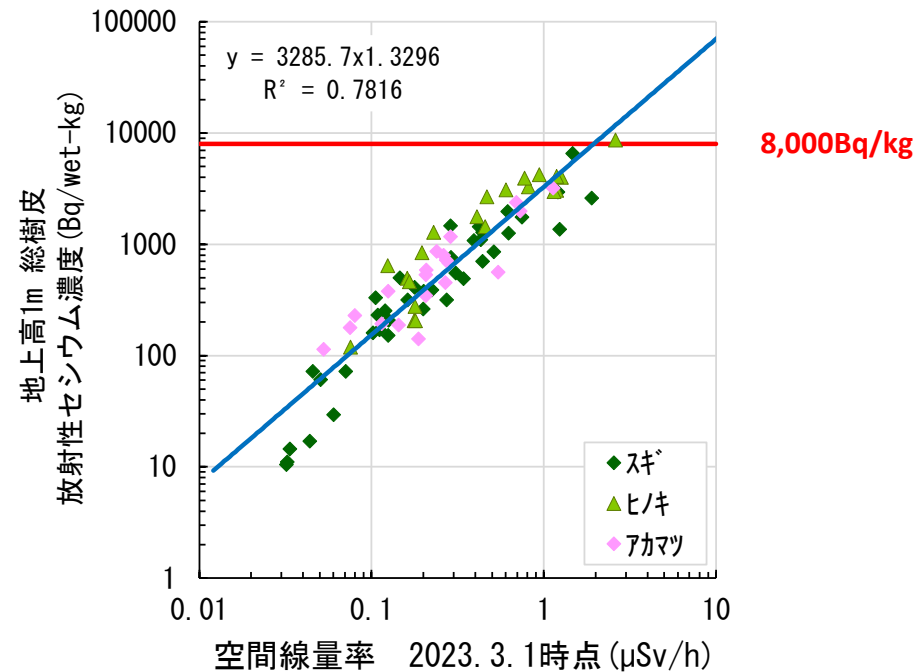
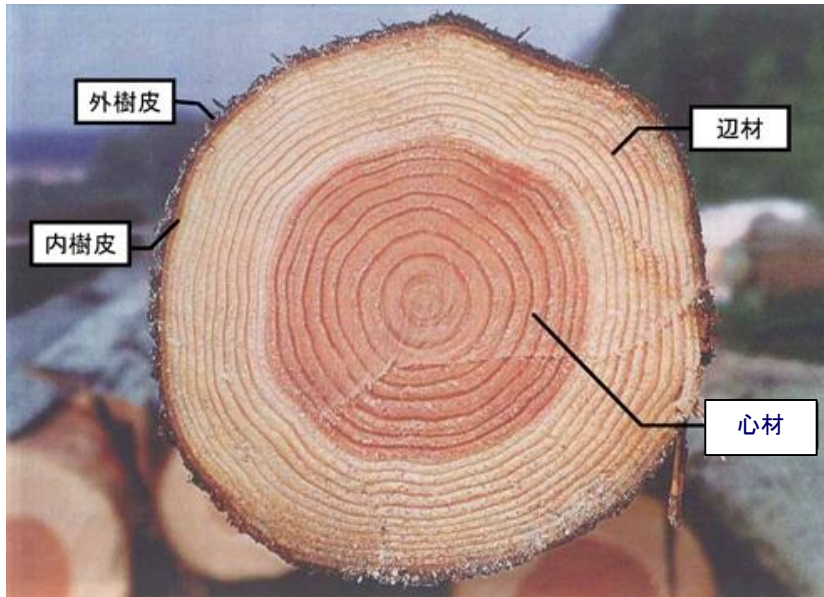


全葉の放射性Cs濃度 (平均値の比較)

R4全葉は、H25旧葉に比べ、Cs濃度は、約3%に低減

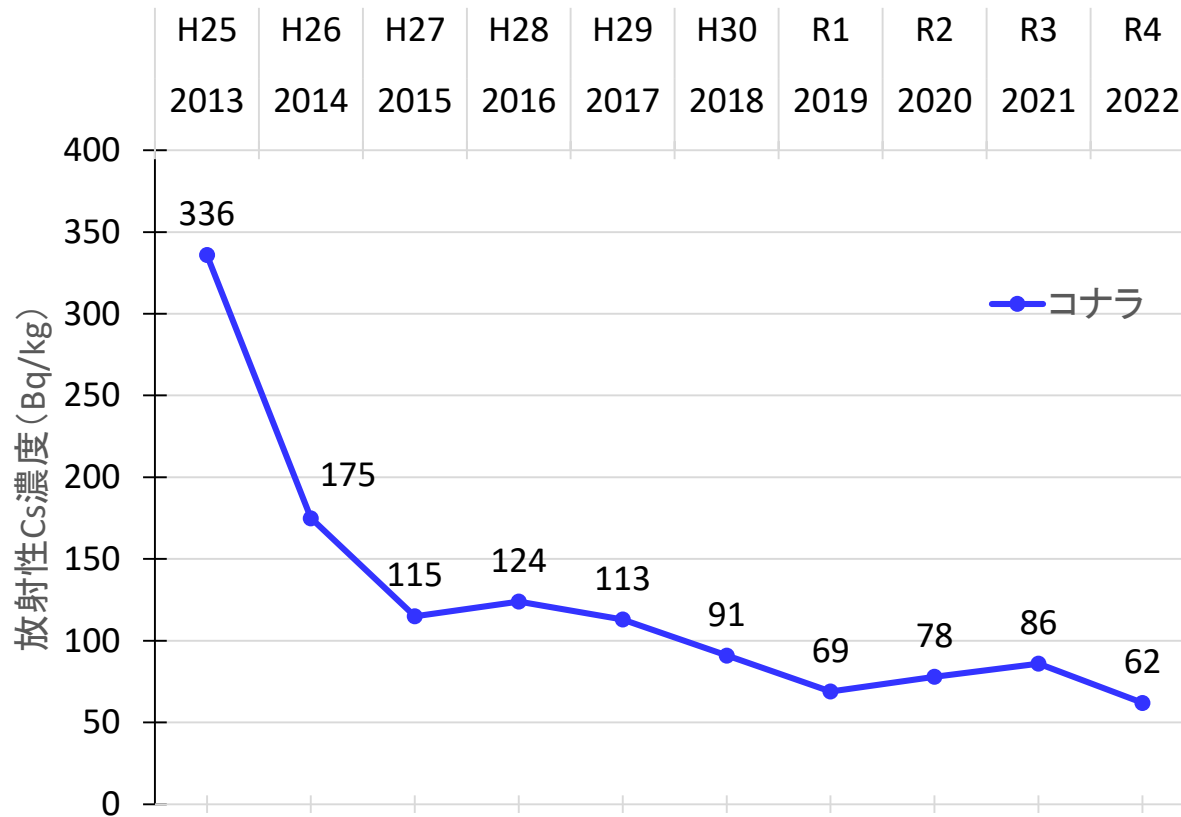
樹皮に含まれるCs濃度

- ・8,000Bq/kg超の樹皮が見込まれる箇所空間線量率を、本調査結果の回帰式などから推定(全樹種平均 $1.95 \mu\text{Sv/h}$)
- ・R4年度調査では1箇所8,000Bq/kg超え。2.61 $\mu\text{Sv/h}$



空間線量率と1m高さの樹皮の放射性Cs濃度の関係から推定

コナラ萌芽に含まれるCs濃度



H25採取時



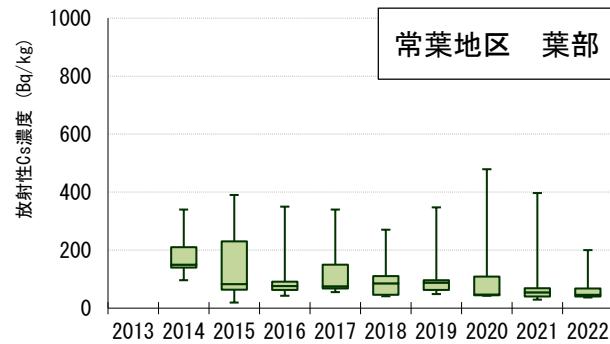
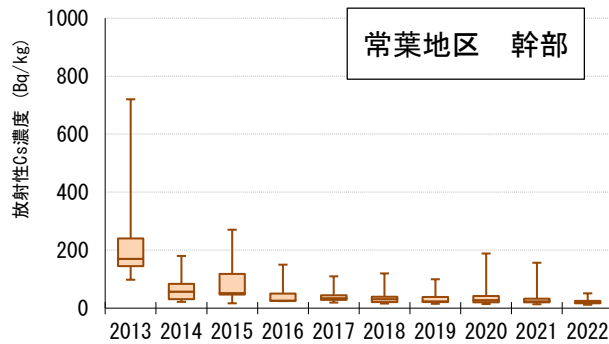
R4採取時



・H25～H27にかけて大きく低下
その後は漸減傾向で推移

コナラ n=24

コナラ萌芽枝に含まれるCs濃度

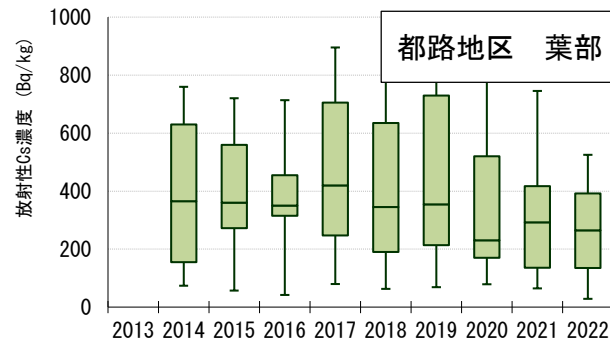
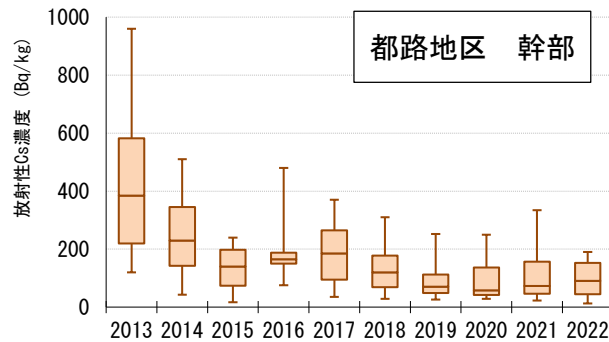


2022年度 空間線量率

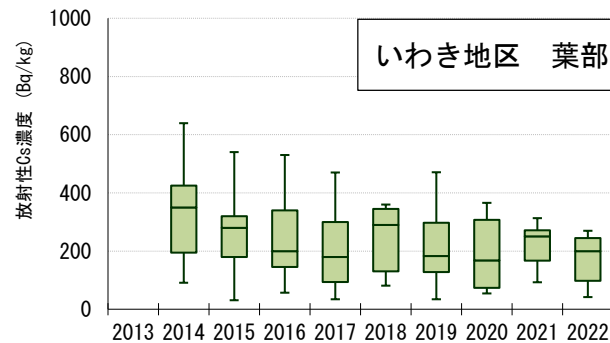
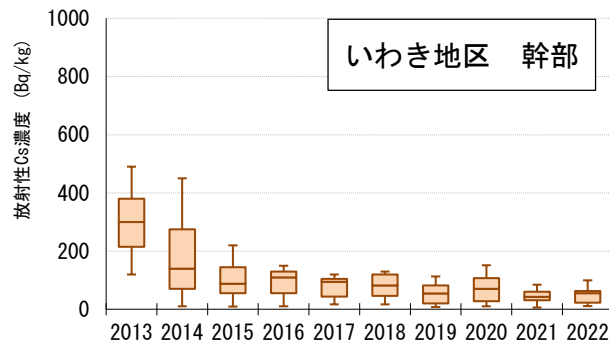
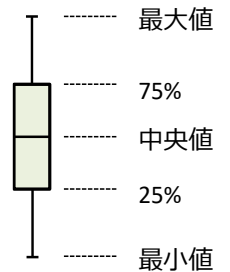
常葉地区 : 0.15 $\mu\text{Sv/h}$

都路地区 : 0.21 $\mu\text{Sv/h}$

いわき地区 : 0.08 $\mu\text{Sv/h}$



凡例



**幹部Cs濃度の低減率は鈍化傾向
葉部Cs濃度はH26年から大きな変化なし**

森林の放射性物質の動態変化

(林野庁公表: 令和3年度 森林内の放射性物質の分布状況調査について 福島県林業研究センター協力)

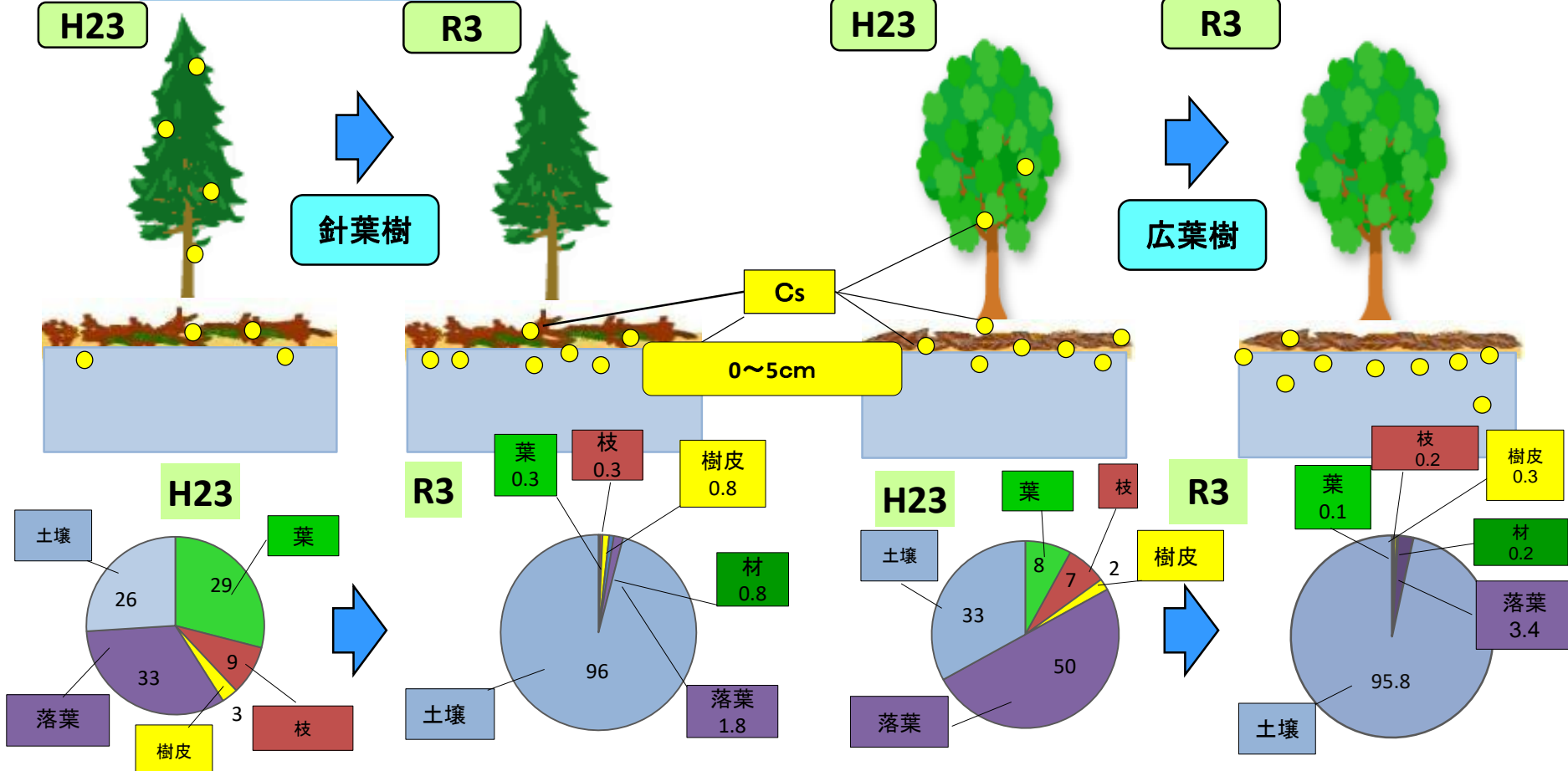
川内村 スギ林

大玉村 広葉樹林

図中の「Cs」は放射性セシウムの略称

樹木Csは全体の2%程度
⇒ Csが土壌に移行

樹木Csは全体の1%程度
⇒ Csが土壌に移行



森林内のCsの95%以上が土壌(大部分は0~5cm)に分布

1 令和4年度(2022年)森林内モニタリング調査の結果

- ・1,300箇所を調査 最大 $2.62\mu\text{Sv/h}$ 、最小 $0.03\mu\text{Sv/h}$
継続362箇所の平均空間線量率 $0.17\mu\text{Sv/h}$ (R3: $0.17\mu\text{Sv/h}$)
継続362箇所 $0.23\mu\text{Sv/h}$ 未満の区域は増加(42箇所(12%:H23) \Rightarrow 263箇所(73%:R4))
1.00 $\mu\text{Sv/h}$ 以上の区域は減少(127箇所(35%:H23) \Rightarrow 0箇所(0%:R4))
- ・空間線量率は平成23年8月と比較して約81%減少
- ・空間線量率はCs物理学的減衰率とほぼ同じく減少
- ・立木や土壌のCs濃度は空間線量率と正の相関
- ・会津、南会津の一部地域では空間線量率がバックグラウンド値に近づいている

2 木材内部のCs濃度

- ・木材内部のCs濃度は、スギは心材が辺材よりやや高い傾向
- ・辺材平均Cs濃度 31Bq/kg (R3:51Bq/kg、R2:44Bq/kg)
- ・心材平均Cs濃度 62Bq/kg (R3:83Bq/kg、R2:65Bq/kg)
- ・Cs最大濃度(1,300Bq/kg)で木造住宅を建築した場合
年間追加被ばく量 0.031mSv (木材利用への影響なし) (R3:0.050mSv、R2:0.050mSv)
※時間あたり被ばく量 $0.004\mu\text{Sv/h}$ (R3:0.007 $\mu\text{Sv/h}$ 、R2:0.007 $\mu\text{Sv/h}$)

3 葉のCs濃度

- ・全葉の平均Cs濃度 326Bq/kg (R3:423Bq/kg、R2:490Bq/kg)
- ・平成25年度と比較して約97%減少。

4 広葉樹萌芽枝の放射性セシウム濃度

- ・萌芽枝のCs濃度は平成25年度から平成27年度に大きく低下し、その後は漸減傾向。

今後の調査内容

1 モニタリングの継続調査

森林内空間線量率の経年変化を継続して観測することにより、今後の林業活動へ向けての現状把握。

2 立木の放射性物質濃度を継続観測

林業生産活動における安全性を確保するため、立木の放射性物質濃度の経年変化を観測。